

三河アララギ

平成二十七年

六月号

第六十二卷 第六号



ニューヨーク日記(104) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

MAY 10, 2015 : Doraemon tofu?

Blue Shoe Diaries



最近こっちのお子様テレビでドラえもんやってるの! ちょっと英語で話すドラちゃんに違和感あるけど。。。日本食品売ってるマーケットへ行ったら買わずにいれなかった、ドラえもんのお豆腐! かわい~

Doraemon!! Too cute. Had to buy this tofu. I love my Dorachan! It's still a bit strange to watch him in English.

目次

第六十二卷第六号(通卷七三八号)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|---------|--------|-----|----|-----|-----|-----|-------|---------|------|-----|-----|-------|-----|----|------|--------|-----|--------|------|----|--------|-----|------|----|-----------------|------|
| 表紙 椰子 | 歌集「スモン」 | 歌集「草々」 | 勿忘草 | 今日 | 葉がえ | 雪の山 | 利休梅 | 時代の変遷 | オオシマザクラ | 異常なし | 枝垂桜 | 先取り | 静かな時間 | 花曇り | 甘茶 | 鳴子ラン | 卯月の移ろい | 水仙の | 語らふものを | 梅花空木 | 浅蜩 | 土になりゆく | 月ヶ瀬 | かんざし | 糸桜 | 現代学生百人一首(二〇一四年) | ことよせ |
|-------|---------|--------|-----|----|-----|-----|-----|-------|---------|------|-----|-----|-------|-----|----|------|--------|-----|--------|------|----|--------|-----|------|----|-----------------|------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------|---------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|
| 今泉 由利 (1) | Blue Shoe (2) | 大須賀寿恵 (5) | 今泉 米子 (6) | 岡本八千代 (7) | 今泉 由利 (8) | 弓谷 久子 (9) | 青木 玉枝 (11) | 内藤 志げ (11) | 林 伊佐子 (12) | 鈴木 孝雄 (13) | 安藤 和代 (14) | 遠藤 脩子 (15) | 伊藤 忠男 (16) | 清澤 範子 (17) | 足立 晴代 (18) | 森岡 陽子 (19) | 富岡 和子 (20) | 近藤 映子 (21) | 半田うめ子 (22) | 杉浦恵美子 (23) | 平松 裕子 (24) | 小野可南子 (25) | 山口千恵子 (26) | 夏目 勝弘 (27) | 阿部 淑子 (28) | 白井 信昭 (28) | 東洋大学 (29) | いーはとぶ (30) |
|-----------|---------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|------------|

私の一首

『俳句』

かさね吟行会

『酔いの徒然』(38)

ある自然科学者の手記(37)

絹の話(55)

短歌に詠まれた茂吉 四十五回

楽しい時間(31)

月ヶ瀬に行く

「水魚」のことから(173)

ことのはスケッチ(438)

編集室だより(二〇一五年四月)

和菓子街道(104)

お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|-----------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|-----------|
| 富岡 和子 (32) | 内藤 志げ (32) | 清澤 範子 (33) | 杉浦恵美子 (33) | 松本 周二 (34) | 山元 正規 (34) | 今泉 由利 (34) | 小川井 素山 (35) | 重野 善恵 (35) | 森岡 陽子 (36) | 柳田 皓一 (36) | 和田 勝信 (37) | 小池 清司 (37) | 植村 公女 (37) | 田中 清秀 (38) | 山元 正規 (38) | 丸山 醉宵子 (40) | 大橋 望彦 (42) | 今泉 雅彦 (44) | 鮫島 満 (46) | 山本紀久雄 (48) | 夏目 勝弘 (50) | 岡本八千代 (51) | 今泉 由利 (52) | 三河アララギ (54) | 平松 温子 (55) | お知らせ (56) |
|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|------------|-----------|------------|------------|------------|------------|-------------|------------|-----------|

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集 「御津磯夫歌集」

いさぎよく皮ぬぎおとし若竹なりゆくみどりのつやつやの稈

P 174

残りゐるは年とかぞへずふる雨を見てゐてわれの時間過ぎゆく

P 176

歌集 「スモン」

大須賀寿恵

梅の枝を巻きて群がる毛虫等の舞ひ立ちゆく日をわれは待ち侘ぶ

三毛猫と吾と見入りぬ明日なきサボテンの花の大きくれなる

アララギの新芽の浅黄五寸ほど日当り悪しきわが裏庭に

歌集 「草々」

今泉米子

螢ひとつ迷ひ入り来し薬室に吾が足冷えて薬をつつむ

雨雫ふくみて栗の花重し雨間の低き雲は動かず

生垣の隙ゆもれくる燈火を夜毎に見つつ秋ふかみたり

あかときを一時風のしづまりて銀杏黄葉にさせる月かけ

書初の習字をさせつつ母われは十年あまり太き文字書かず

窓下に冬草青く萌えいでぬ吾が子の病も癒えてゆくべし

紅梅のふふめる枝に淡雪のけさふりたれば立ちて見てをり

反故ほごを焚き父が沸かせる今日の湯のあふるるばかりに吾が浸りをり

亡き母の縫ひ直しおきし浴衣にて父が夕べの空を見てゐる

窓あけて教へたまへる青山の裏の近道われかへりゆく

勿忘草
ワスレナグサ

蒲郡 岡本八千代

忘れてはならぬことさへ忘れつつ勿忘草の花の藍色

忘るるも忘るなかれも藍淡き花一色ひといろの小さき粒花

悩みつつ活くわしてゆくしかなきものか今朝は佇とどむ勿忘草の処

いつしかに八粒の薬呑むやうになりたる己のあはれさびしさ

勝ちし時も負けたる時も少年野球の少年らしさに涙すわれは

形原の地藏祭とていただきぬ君はわざわざお柏餅を

にぎりめしたった一個を作るかな見るものはまた春の雨だれ

仲良しの友に電話をしたれどもまた応答もなく春雨ふる夜

おぼろ月やさしく照らす今宵こそ個室に独りのいもうと思ふ

今月の「ノボさんのこと」書き了へてポストへ向かふおぼろ月の下

今日

東京 今泉 由利

自らの思考範囲を越ゆることこのごろ多しこのごろ凄まじ

ひたすらに青竹食ぶるパンダパンダ絵描きとなりて向ふひたすら

ゆき過ぎし春に追ひつく奥多摩は桜よ桃よ片栗土筆

譲り葉ゆずの譲らるる葉の萌えいづる保護者となりしごとく観てゐる

濃紫蘇芳こむらぎすわうの花の咲き初むる母に似合ひし着物の色よ

今もふ山の気配は消え去りし道灌山の頂上に住む

寂しさの漂ひきたり今日の日のゆっくりゆっくり暮れてゆくとき

小花咲くシロイヌナズナの遺伝子のたった一つが壊れてゐると

目に見えぬ火山のガスを今日は見き可視化方法教わりし故

原点のかすかなゆらぎにはじまりぬそして私の今日の命に

葉がえ

豊川 弓谷 久子

咲き染めし御津山桜はいかならむ無情の雨の四月となりぬ

ため息を吐きつつ見てをり満開の桜に雪の降るニユース

訪ね来し上地八幡宮鄙びたる神社に古き歴史のありて

鬱金桜と名付けられをり神社の庭に今満開の薄緑の花

花筏の季はすでに過ぎてをり空しく佇ちをり御津川の岸

春雷のとどろきしあと降り出す外出中の子を案じをり

亀は万年丈夫で長生と子の編みし小さき亀が机に並ぶ

編みぐるみの小さき亀を届けたし見舞に行けざる友を思ひぬ

葉がえの紅葉と教へて呉れし友ありき古き櫛の葉しきりに散りぬ

櫛の木の下の枯葉をかき寄する若葉萌えたつ葉がえの季節

雪の山

新城 青木玉枝

季ときの流れ老いの残り世追ひかけてすべなき日びは暮れてゆくなり

山里に四季のうつりの花々を心ゆくまで今日の始まり

雪の山かすみの山に雲がくれとりわけ夕陽の山は美し

一歩一歩ふみしむ足裏に心持良き春のリズムに心安らぐ

はなれ来て知らない土地の独居は枕をぬらす毎夜幾度も

折鶴を一枚一枚色紙で折り始めたり六十羽の鶴を

千羽づく足らないノレンに又折りて立派なノレン出来上りたり

くぐる度ゆらゆらゆれて振りかへる行つて来るわね声をかけて

伊丹の夢蒲郡の夢毎夜さめて悔いの日びなり帰りたい今

縁ありてこの山里に暮らす日び今更悔いてもおそかりし今

利久梅

豊川 内藤 志げ

椿の枝ゆらゆら揺らし鶉は逆さかなりて花を啄む

乳母車嫁が出し来て夫が洗う新しく見ゆ頼りに歩まむ

白き花今が見頃と見上げおり利久梅よと友は採りくれる

何願うこともなければ氏神様の今日は祭礼小雨の中を

歌集より越中富山の風の盆松井様と共に買いし葉が

風の盆賑わいの先にと練習の輪に踊りしは松井様なりき

庭の中牡丹の蕾み尖りて揃う今日も雨なり障子の窓より

ひねもすを雫の止まるを見つめいる傘をさしては歩めぬわたし

雲の間に本宮山の藍の見ゆ雨は降る降る今日も雨降り

咲き盛る牡丹の中に尖り見ゆ一つ蕾たのしみに待つ

時代の變遷

岡崎 林 伊 佐 子

公害も騒音もなきふる里は静寂となる時代の變遷

先祖らのひらきし田畑も広びろと荒地となりて人住まぬ里

わが代よより状さま変へりたるふる里の棚田も畑も深森と化なりぬ

握あく促とただ働きて親友はわれより老いて峡深く住む

閑静な住宅地に住み四十年借地畑に農仕事たのしむ

農仕事を啜むことが生き甲斐となりて安らぐ老いたる今は

二十代にて突発難聴に苦勞せしことも懐かし老いとなりたり

聴覚を失せたる吾に添ひましし夫も哀れな一生と想ふ

馬鈴薯に茄子の葉上に体のせ天道虫は昼を眠れる

里の庭に飾り置きたる丸き石藁をたたきし亡き姑しのぶ

オオシマザクラ

沼津 鈴木孝雄

石垣の土が無いのにスミレソウ草刈る手止め花を眺める

山腹の廃校になりし静浦中花ひらひらと校庭に散る

小雨降る獅子浜堤を散歩する香り漂うオオシマザクラ

白き花の上に添いたる緑の葉俗事忘れるオオシマザクラ

クマバチがローズマリーに飛んできて紫の花巡り蜜を吸う

黄色花広がる畑放置さるなんとキャベツのとう立ちの花

静浦の海に押し寄す赤潮は風に流され波紋広がる

テレビ壊れ修理部品なく新品に次は我が寿命との競争か

駅に向かい往きは逆風帰りもまた思惑外れ逆風となる

女房留守畑の野菜食べたいとクックパッド見てニラ玉作る

異常なし

豊川 安藤 和代

春の陽のキララの海に身をまかす平安なるや海鳥の群

「それ」「あれ」で会話の続く夫といて菜種梅雨なるひと日は長し

案じいし夫の診察異常なし自動ドアさえ軽やかにあく

片言の様な雨蛙の声聞こゆ桜を散らす雨の午後です

揚げ雲雀のさえずりに力もらいたりいつしか吾も深く畑打つ

弓張りの山脈バックに春の畑雪積る如く梨の花見ゆ

体より数十倍の虫運ぶ蟻よ頑張れ夕暮れ近い

枇杷の花びつしりと咲くこの年に好みいし孫は遠く住みをり

梅の実のふくらみ増せば父母を又偲ばせて通う風あり

さらさらと流れは高く岸に聞き合せてスキップしてみたくなる

枝垂桜

蒲郡 遠藤 脩子

天龍寺の参道の脇に寄せらるる花びらこんもり小さき山なす

満開の枝垂桜は神宛に入る人ごと歓声湧かす

脱ぎ揃へし夫と我が靴のそこかしこ模様のやふに花卉張り付く

雨傘を杖代りにして仙洞御所の庭を巡りぬ緑に酔ひつつ

歩み遅き吾を待つらむさりげなく夫はズボンの裾を払へり

両の手に余る土筆の袴を取りキンピラにしてと夫が差し出す

夕方の前触れ無しの停電は二時間余続きぬこの地域のみ

携帯電話での返事を頼りに蠟燭の明かりのもとでトランジスタラジオを聴く

情報の無きこと不安あらためて電気依存の暮しを思ふ

またしても大地震おきネパールの五〇〇〇人余の生命奪はる

先取り

大阪 伊藤忠男

日々変わる孫のしぐさに目をほそめ財布のひもの緩むこの頃

アイフォンにメールツイッター今とならば手紙と日記過去のことかな

青空の広がる街も人の波誰も見上げずただただ急ぐ

時折に起きる心臓不整脈ぬべなるかなか動き続けで

里に咲くスマイレに蟻入れ色変える昔の遊び今思い出す

萌え色に包まれ霞む山里を彩る蓮華たんぽぽの花

花散るも季節先取りこの暑さ春の風情にひたる暇なし

瓦礫山崩れる煉瓦砂塵舞ういつもながらに人無力なり

手と口にくしゃみやみこらえる人多き風邪か花粉かそれとも噂

通勤と向かうが逆の電車に乗る人少なくて席独り占め

静かな時間

春日井 清澤 範子

春風の吹きて散策樂しかり吾に与えくる静かな時間

公園の木陰は涼し芽吹きたる芝の上にてしばし休息

気持ち少し沈みたるにも杖をつき公園の芝生を踏みつつ歩むも

芝生の上にビニール敷きて座りゐて歌書きている吾に春風

公園に陰長くして子とも遊ぶ吾もブランコに揺れてみるなり

剪定し椿も櫟いちょうも形良くまあるく丸く形整ふ

吾が歩みと対面に児等帰り来る低気圧にて花びら散る道

低気圧の続きで桜の花あわれ一度に散りて川に流るる

堤防の水の流れは細くして小鳥は花びら落して去りぬ

剪定して丸く整ふ貝塚伊吹の中からヒヨ鳥二羽が飛び合ふ

花曇り

東京 足立晴代

花曇りはなぐもたちまち変りし空見上ぐ戸惑う人々そこゝに

雨風に飛花ひか舞う空は行く春を惜しみて余る心地なりけり

八重やえの花過ぎ行く春に色そえて技もたわゝに集いて咲きけり

詠みし歌改め見たり眼に余る誤字ごの多きに恥ずる吾なり

春の雪花ゆきびら散りて道の上に白々ありて夢景色かな

木れんの春の陽浴びて紫の深き色増し生々息吹く

花水木そよ風うけて楽しげに咲くゆるが如く見ゆる日々なり

山々の雪解ゆきげの水の流れゆく音鳴る川に春を知りたり

光満ち花開きたり春の日に過ぎゆく風もさわやかにして

芽吹きし若葉陽に映えて恵豊かに過す日々なり

甘茶

東京 森岡陽子

雨予報傘の嫌いな妹は持ったり置いたり思案顔なる

黄水仙役者の屋敷の黒塀に春風の中沿いて咲きりをり

空は青桜は春の青春は携帯片手に初デート行く

春日和てんてけてんの出囃子に噺家の着物萌黄色なる

あしらいに木の芽をのせた炊き合せ女将笑顔でおいでやすとや

川沿いの桜一気に満つる時花びら程の人の多さや

源平に紅白まじる桃の花小雨の空に傘如枝垂れ

浅草に江戸の風情の芝居小屋十八世の夢は続きぬ

花祭り甘茶を注ぐその手にも春の名残の雪の降りける

花水木淡い紅色白い色小学校への路に咲き初む

鳴子ラン

東京 富岡和子

鳴子ラン黒土もたげ弓なりに斑入りのすがた花壇を染める

賑いの仲見世通りに外国語しだれの桜と五重の塔と

散り花はそつと寄りくる足さきにピンクの花弁に来年やくす

雪さくら各地の様子は映像で花見たいせい満喫の夜

山椒の芽吹き頃合いたけのこの姿よろしいあじも良ろしい

ふきのとう背丈大きく花咲かす北国に来て北国の景

白い蝶チューリップ赤わが庭はむかしむかしの絵本のなかに

三日月を宵の明星照らす春絵の具の青と森の黒ぐろ

音はなく木洩れ日のみが竹林に風のみ清かたけのこ我が手

季節がわり追われしこの日区議選へ鯉のぼりとも夜風を受ける

卯月の移ろい

名古屋 近藤映子

見降しの緑陰歩道の櫻木は今満開の花風に散り居る

彼岸過ぎ夫の御魂みたまは極楽の百万奥度のどの当りかな

見降しの川辺の緑香流川黄のタンポポあちこちに

マーケット障害者忘れ久しぶり杖付見歩き疲れ居り

月始め娘の帰り遅ければ一人電子レンジを頼る夕食

東京の時習館六回生二人の来訪の知せに私は元気な気持

葉櫻の緑の歩道も美しや木もれ日の光りキラットまぶし

診察日医師に握手を求められその手の暖かさ始めて感じる

わが右手感覚わずかに戻りつつ有ると感謝(クライティチュード)の検診日

我身をばまだ生きている心も身をも杖を付きつつ

水仙の

新城 半田うめ子

水仙の数多にての美しく庭中にての咲きてゐるなり

わが友はやさしき女性子供の無く貫ひし女性美人でありたり

結婚して子供の無くやさしき友よ老人となりたり

岡田様時折りなりぬさつま芋多くを下さりやさしき友なり

山辺の道を歩きたり京都にての佐々先生の親切なりて

室ヘヤの美しくなりたり掃除して孫の親切有がたく思ふ

語らふものを

蒲郡 杉浦恵美子

聞き慣れぬ鳥の鳴き声裏藪に三日続きの雨が上がりて

鳥の声聞き居る我は未だ厚き綿入れ半纏着込みて居るよ

夫居らばこの珍しき鳥の声話題にひととき語らふものを

完熟の苺三つ四つ口に入れあとは一氣に鍋に抛れり

ボランティアガイドのこの方同年配旅の出合ひがなにやら嬉し

若き日の与謝野晶子の歌掲ぐ看板見つつ堺山之口商店街

行き詰る気儘な暮しも行き詰る単調すぎる心動かぬ

ああ我は何処に行かむとするのやら今日も一日我と向き合ふ

土筆摘み数本あればこと足れり思へど摘む手が止まらない

信号待ちバックミラーに一面の草原映る知らぬ間に初夏

梅花空木

豊川 平松 裕子

冬ごとに枯れ果てたと思はしむ梅花空木に若芽きざせり

見よと伝ふ人なく我のモッコウバラアーチを覆ひ盛り上かり咲く

絡むものなければカラスノエンドウの莖に絡まるアケビのつるは

和毛覆にこげふアツツ桜の小さき芽の鉢にはびこるカタバミを抜く

株分けをせねばとそのままにスエ先生よりのキンギアナム咲く

ただ一つ花つけ花のときを終へ白侘助の新芽競へる

薄ら氷ひの張りにし鉢に潜みぬし白きメダカから餌求め来ぬ

日の当たる日の当たらぬと一本の柿の葉の色おのずと違たがふ

ひとことづづ悟す如くに語りたる君と我との関りは何

悟されたるふりして帰る我のこと何を思ひて見送る人か

浅 蜷

豊川 小野可南子

我が鍬に放り出されし小蛙は後退りあとずさつつ元なる穴へ

「見守り隊も健康体操もおやりなさい」めまい外来の医師の診断

菜花摘む我につめたき雨の粒又降りはじめ菜種なたね梅雨なり

味噌汁の具にするほどを獲りてくる夫に言ひ置き磯浜下る

鎌の刃に浅蜷があたるひとつ採るひとつがあれば脇にも一つ

何年ぶりか手に伝ひくる浅蜷なり余念もあらず膝つきながら

両の掌に納まるほどを良しとして浅蜷清めて帰り行かむよ

我が手われに採りしアサリの御御おみお付け夫はだまってお代りの碗

遠くよりの我が呼びかけに孫佑真ジャンプしながら応へてくれぬ

楽しくも面白おかしく言ひくるこの孫ありて我が老いの日々

土になりゆく

豊川 山口千恵子

足元のスミレタンポポホトケノザ見上ぐる桜は早八分咲き

野の道のタンポポぽぽつぽつ目立ちつつ未だ短き茎のまま咲く

休耕の田に一尺ほどの丈の麦吹きゆく風にその葉の光る

止め置きし桜の下のわが車フロントガラスに花びら散りぬ

はらはらと桜の花びら散り落つる土に落つれば土になりゆく

赤と白プランターのチューリップ雨に咲きたり雨に散りたり

電線に今朝も鳴きゐる一羽の鴉二日続きの春の雨降る

ころがりゆく白き小さき錠剤の行方ゆくえ見定めわが拾ひ上ぐ

つつましき部屋に一人住みながらこの春より高校教師となる

ワンルームに住みてこの先何年か遠く彼の地に勤める桃子

月ヶ瀬

豊川 夏目勝弘

尾山にて我もバス降りくだり行く梅まつりののぼり立つ道

食堂の文字うすれる一軒あり古びしカーテン少し開きをり

コンビニもなき月ヶ瀬の街を行く梅とお茶とのみやげもの

浴花亭の話しをこまごましてくれし店の甘酒に少し安らぐ

十日月に谷道あやに下りしと我は傘さし舗装の道を

瀬音なく流れの見えず月ヶ瀬川ダム湖となりて静もる水面

紅梅の色を映すこともなしダム湖は緑に濁りのひろがり

対岸より短かくウグイスの一声ありそのあと鳴き声とどくことなし

草モチと自販機よりのカップ酒月ヶ瀬にての今日の昼飯

梅林など見ずともよろし浴花亭の玄関前に立てたりうれし

かんざし

横浜 阿部 淑子

満開の桜トンネル過ぎゆけば花びら舞いて友のかんざし
土手添いに大枝拡げ咲き誇る桜を愛でつよくぞ五千歩
首を振る間にもリニャは走り行き世界最速夢を運びぬ
予約日に夫と半日検査受け常の生活評されし幸
変動の激しき気圧に病い増え救急隊員院内を走る

糸桜

豊川 白井 信昭

堤防の冬草日々に青みゆく新幹線までのわが散歩道
親戚の拓きし畑も山に還る思い出はるかわが若き日も
奥山田さくら恋ひ来ぬ峡かいの里枝垂さとるる老木持統桜とも
花八分人出は二分なり峡の里白く揺れおり午後の陽に映え
吹く風にしなり枝垂るる糸桜大きく撓む地に触るるまで

現代学生百人一首(二〇十四年) 東洋大学

都会から地元へ帰るバスの中ぼつりぼつりとまた灯が消える

岡山市岡山後楽館高等学校二年 久保史織

長男で弟二人荷が重い進路決めなきや母支えなきや

広島県立広島特別支援学校二年 潟岡宏平

広島弁たとえ「怖い」と言われても言葉の裏には優しさがあり

広島新庄高等学校一年 真倉琴子

この歌詞が好きだと笑う君を見てそつと検索アーティスト名

広島新庄高等学校二年 北尾薫

あと一年もつてくれよと制服のほつれた袖口つくろい直す

広島新庄高等学校二年 木村紗和音

『いよよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

幼には誕生日プレゼントに白きベスト編みてやらむと棒針を持つ

青楽の抹茶茶碗に茶を点てる深々と貫乳の色濃くなりゆく

吉見幸子

証書受け壇上さがる卒業生らそれぞれの思ひの足取りにして

「ふるさと」を歌ひて終はる卒業式みどり深まるこの原山に

牧原正枝

知覧の茶を息子からけふ送りきぬああ特攻隊の手紙思い出す

春來たるとちらからともなく誘ひあひ今朝も夫とのモーニングコーヒー

岩瀬信子

点滴器引きずりて歩くシャリシャリの音の聞こゆる夜更けの病棟

売り棚に残りてありシクラメンわが部屋に今咲き咲きてをり

石田文子

いつものは無くても買はなきやもう弥生キティーちゃんのピンクの手帳よ

吾が植ゑし金木犀の枝々をまたしても切る啓蟄の日の義父ちち

森厚子

燕きてさへづりやまぬわが庭に玄関の戸をそつと閉めにゆく
一番にわれに報告したきらしにわが先に言へば祐希泣き出す

山崎 俊子

書き溜めし写経納めむとけふは来ぬまづは一卷四天王寺様へ
丁字ふふみうから三人坐りたり奈良薬師寺の写経道場に

三田美奈子

地球から離れたくないと泣く五歳飛行の怖さをやうやう覚えしか
姉七つ今日だけ優しく弟に「ここはお空で宇宙じゃないよ」

水野 絹子

潮干狩りはつらいつらいと言いなながらくれたる浅蜷今朝もあさり汁
わが畑の日だまりの中間こえくるまた美しきうぐひすの声

牧原 規恵

電車降り家路に急ぐわれたちに吹きくる春の風が過ぎつつ
遊ぶ子らを見しことも無くわが町の馬相の公園今日も静けし

稲吉 友江

隣席少女の英語耳にするオーストラリアへひとり帰るらし
息子らのいよよ近づく帰任の日今宵われらは桃の節句よ

鈴木美奈子

私の一首

薄暮なり宇宙ステーション一分間板室上空で観望の幸

富岡和子

風さやか三百年の松の枝にカシオペア三角四角天の川あり

於那須板室温泉大黒屋木庭、H 26・10／30・17：04、若田船長搭乗の国際宇宙ステーション。偶然の出会いでした。紅葉の那珂川のせせらぎを聞きながら流れ星より少し遅い光りを追いつ見上げました。二泊快晴快温に恵れ、露天風呂は専有高い吊り橋、コスモスの咲く散歩道、近くに住む級友も加わりそば店でお腹も一杯。解説付星をみる会に参加澄んだ夜空に感激。自然とアートを大切にする大黒屋。都会の音のない夜を堪能した旅でした。

長過ぎる一米の物指も二耗の目盛は製図しやすし

内藤志げ

今毎日の有り余る時間三河アララギ歌集Ⅵを読み返す時に。歌が出来ない時の歌と思いますが二十余年前の自分を思ひ返す事が出来たうれしさ。雨の日に生地を買ひ夜なべに新聞紙に型紙を引く遅くなると明日の仕事に障ると思いつつ自分の体型に合わせ型紙を先生に日記替りでよいと教はりながら、とてもよい思い出になりました。物差も耗の目盛はも、との、とは、の送りがなの使い方が私にはまだよく理解出来ません。

氣持ち弱く少し悲しき昼さがり庭の椿の花咲き開く

清澤 範子

わが家の庭には貝塚伊吹に並び紅白混じりの椿があります。いつも平常心でと思ふのですが、副作用の症状も、加齢と共に深くなり悲しい気持になることもたび度です。そんな時大きな花卉を見せる椿を、廊下よりじっと眺めて、良きにつけ悪しきにつけ心が癒やされて元気をとりもどす私です。

何方にも頼れず頼らずこの暮しアクティブどころかふはふはしてる 杉浦恵美子

『三河アララギ』平成二十六年二月号

作歌にあたり、歴史的仮名遣や古文法に拠るべきか否か、長い間随分迷って来ましたが、実際にはそうすると古めかしく感じてしまう場合が多いのです。かと言って現代仮名遣に統一してしまうのもためらわれ、最近ではまぜこぜに使用しています。すると表記は倍増して融通無碍。この「ふはふは」も発音すれば「フワフワ」ですが、字面としては平仮名で歴史的仮名遣の表記が頼りなさや抜け感を表せて、却って新鮮かも、と発見しました。

『俳句』

満ち潮の差しくる音や浅蜷舟

松本周二

蒼穹に見えざるものや揚雲雀

残る鴨つがひは即かず離れずに

天日の水やはらかにく蝌蚪生る

山元正規

春惜しむ文字の掠れし句碑なぞり

散りそめて風は四方より花の夕

何神か会釈してゆく春日和

今泉由利

旨酒を携へて来よ春ごもり

花びらは私に降る君に降る

花筏割れて二筋帯のごと

川井素山

木の芽和へ添へて朝餉や旅の宿

木魚の音まだ若し彼岸僧

をだまきや袱紗さばきの手品めく

小柳千美子

風の如擦れ違ひけり春シヨール

母呼べば小手毬揺れて応へけり

靴底の花びらいくつ払ひけり

重野善恵

風雨去り濡れし花薬強く掃く

小躍りす去年の芍薬花芽持ち

真青なる古刹の空や糸桜

田中清秀

ゆく春や貝殻洗ふ波の音

花の名の立札残り春惜しむ

ジャズ流れ珈琲煎るや花の雨

森岡陽子

琴の音で迎へる茶屋の桜飯

春風や上手になったピアノの音

ナイターのボールのゆくへ春の月

柳田皓一

木々の花盛りを過ぎて花水木

御守りの鈴の音やさし花水木

無線機のへり追ひ回す燕かな

和田勝信

灯台を囲む蘇鉄や春疾風

暖かし子ら歓声の潮だまり

銀輪を歪めて土手のかげろへり

小池清司

春惜しむ五分遅れの古時計

新茶汲む鉄瓶の湯気やはらかし

よそみして軽き握手や花の昼

植村公女

短足の犬の合羽よ花時雨

落椿踏みしめひと日の憂いかな

かさね吟行会

「上野動物園」 四月

田中清秀 吟行記
山元正規 選句

春眠やパンダ孤愁の檻の中 周二
パンダ舎に子と立ちし日や花おぼろ 善恵

パンダはネパール語で竹を意味するポンヤに由来するという。昭和四十七年日中国交回復の記念にカンカン・ランランの二頭が来日し日本国中に熱狂的な人気を博した。その後一時不在の次期があったが平成二十三年四月になり中国より借り受けたリーリーとシンシンが再度来日し現在も子供たちに大人気である。今回のかさね吟行会はこのパンダのいる上野動物園での開催である。

平成二十七年四月十日、参加者は松本周二、山元正規、川井素山、今泉由利、森岡陽子、柳田皓一、和田勝信、山迫京子、重野善恵と筆者の十名であった。

今年四月月上旬から寒い日が続き当日も天候はうす曇コートが必要な陽気であった。早速パンダ舎から見物を始める、パンダはのんびりと背中を丸めて昼寝の最中で愛嬌のあるたれ目の顔を見たかったがなかなか上手くいかない。

続いて長い大きな鼻で上手に餌を食べるインドゾウ、与えられた生肉を啄ばむワシやタカ、檻の中でつまらなそうな様子のライオンや走り回るトラなど参加者皆童心に返り時を忘れての見物となった。やはり愛嬌があるのはお猿さん、生まれて間もない子ザルが親にしがみ付き戯れあう様はほのぼのと心暖まる気色である。

子雀の千切るひと花ゆるく落つ 由利
春寒や猿も肩よせ固まれり 素山
猿山も桜葉降る曇り空 陽子

上野動物園は明治十五年に開園した日本で初めての「動物園」である。大正十三年に昭和天皇のご成婚を記念して東京市に下賜された。その後戦時中の猛獣処分と呼ばれる悲しい出来事など悲喜こもごもの歴史をもって

いる。現在四百種三千点の動物を飼育し、広い園内はパ
ンダのいる東園と動物と触れ合えることも動物園の西園
に分かれイソップ橋とモノレールで繋がっている。西園
ではオカビヤコビトカバなど可愛しく珍しい動物も見
ることができる。

嘴広鶴微動だにせぬ日永かな

正規

水温む水滴はらふ河馬の耳

清秀

春寒や目玉動いてハシビロコウ

勝信

桜は既に葉桜となって仕舞ったが園内のそこ此処には
春の花が咲き「春を惜しむ」までには至っていない。まだ、
八重桜は満開である。更にスマレが咲き揃い満天星ツツ
ジが咲き始め楓の花も咲き風流人たちを楽しませる。動
物の姿と植物一群のコラボは俳句心を掻き立てる。

曇天に枝を広げて八重桜

京子

噂や上野の森の雀どち

皓一

昼を大幅に過ぎ空いたお腹を抱えながら動物園を後に
する。今回の句会場は上野駅近くのカラオケ店で行な
れカラオケルームの閉ざされた空間で静かに俳句を纏め
るのは始めての経験だが参加者の評判は頗る良い。囁目
三句出し、隣の微かな歌声を聞きながら何とか作句にこ
ぎ着けた。

次回は昨年亡くなった恩師喜仙さんを偲ぶ吟行会を行
なう予定とし、食事と飲み物のみで一曲も歌わず散会と
なった。

■かさね吟行会■

日時 平成27年6月12日(金)

場所 我孫子

集合 我孫子駅改札口 11時集合

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（三十八）

丸山酔宵子

『山笑ふ』

関越自動車道を一路長野・軽井沢方面に向かうと、岡あたりから山々の緑が増し、清しい風景が眼前に迫ってくる。碓氷峠を越える頃には、まだ頂き近くには雪が残っているが、息を吹き返したような浅間山が忽然と見えてくる。

俳句の春の季語に「山笑ふ」があるが、木々が芽吹きにかかる春の山は、霞のなかで笑っているようで、駘蕩として心がなごむのである。

季語で夏は「山滴（したた）る」「山茂る」、秋は「山粧（よそお）う」「山飾る」、冬には「山眠る」と言い、笑ったり、化粧したり、眠ったりする山の四季を、擬人化するの日本人の季節に対する繊細さの現れである。このよ

うに鮮やかな変化をもたらすのは、芽が出て若葉になり、青葉が茂り、紅葉しそして落葉する落葉樹であるクスギ・ナラ・カシワ等が主役。しかし落葉樹ばかりでは色鮮やかにならぬが、引き立てるのはカシ・シイ・マツ・スギ・ヒノキなどの常緑樹で濃い緑の陰を織りなし、それにクリやカキやビワなどの果樹が加わって鮮やかでそして艶やかな色合いを醸し出している。

活火山である浅間山の火口からは、白い噴煙が上がり、晩春の霞と一体となって漂う季節になってきた。サラブレッドの背の様になだらかに長く伸びる裾野には常緑樹と落葉樹が広がり、麓には水田と畑が長閑な里山の風景を作っている。

この風景はセザンヌが好んで描いた、生まれ故郷の町 エクス・アン・プロヴァンス地方の象徴的な存在である サント・ヴィクトワールを思い出させてくれる。

浅間山の裾野、軽井沢の西隣の御代田は、「ノベンバー ステップス」で有名な世界的作曲家の武満徹がこよなく

愛した土地でもある。武満徹は「MI・YO・TA」と言う素晴らしい映画音楽を作っているが、余りに美しく素晴らしい曲なので、友人である詩人の谷川俊太郎が、武満徹の死後作詞をしたのである。

木もれ陽のきらめき浴びて近づく

人影のあなたに青い空がある

思い出がほほえみ時を消しても

あの日々の歓びもう帰ってはこない

残されたメロディひとり歌えば

よみがえる語らい今もあたたかい

忘れられないからどんなことでも

いつまでも新しい今日の陽のように

〔MI・YO・TA〕 谷川俊太郎

このような地にログハウスを建てたのは二十数年前。

その当時は浅間山を背にした里山が豊かに広がっていたが、現在は減反政策によるのか、水田も干からび放置されたまま。驚くことに、突然、造成され電柱が建ち、あちこちにこ洒落た小奇麗な住宅が立ち並んできている。

しかし、高原の自然の素晴らしさは何物にも代えがたい。早朝の散歩はいつも欠かさない。朝露に濡れた木々に、射し込む透きような陽光。夕ともなると、一風呂浴び、ペランダで、夕焼けに染まる浅間山を眺めながらの琥珀のビールの味はまた格別。初夏の香りも感じる爽やかな風がやさしく吹き抜ける……。

山笑ふ浅間の煙り雲に溶け

酔宵子

ある自然科学者の手記 (37) 大橋望彦

「野田家の女書生」

私を青森へ送る為、高橋の伯父を頼みましたが、家の伯母の申すには、『男では却って、家庭の様子が詳しく判らぬから、私も一緒に付き添って行こう。』と、伯父と伯母の二人に送られて青森に向かつて出達致しました。時は、四月中頃で季節も良し、私は喜び勇んで居りましたが、母の身に成れば、私を手放すのを案じられ、余り気が進まぬ様子で御座いました。

皆が頻りに勧めますのと、私が自分から、『是非、野田様のご厄介になり、学校へ通い勉強したい。』と、せがむ為、母も是非無く納得致したのであります。

其の頃同じ様な運命で、函館へ修業に出られた女性が居ります。旧藩の家老山川大蔵様(後の斗南藩大参事)の妹子様で、其の名前は忘れましたが(山川咲子様)、後に大山(巖)元帥の奥方に成られた捨松様です。私より一つ年上であられましたが、函館に居る宣教師、しかも米国人の元に、教育を受ける為、御出向きになり、次いで米国へ留学遊ばしたのを承知致して居ます。此の方が御出達の時『最早捨てる積もりで、遣わす』とて、捨松様と改名せられたと、承りました。私はい此の事を何と無く、好ましく思つて居りましたので、尚更進んで参る氣に成つたので御座います。

母は名残を惜しみ、序に野辺地の三つ星家へ立ち寄り仕事をさせて頂こうと、野辺地まで同行されたので、生れて初めて、

賑やかな嬉しい道中を致しました。途中、三晩程泊まりを重ね、青森へ昼頃着きまして、直ぐ野田様へ上るのも如何かと申して宿屋へ泊まり、野田様へ使いを出しまし処、『夕方参るように』との仰せがあり、衣類等着替え、御案内の時刻に同家を訪問致しました。

御屋敷は元、津輕藩の陣屋で、大広間が県庁となり、殿様の御居間が県令の官邸、亦、奥御殿が野田大参事の御屋敷となつて、其の立派広大なのに一同度肝を抜かれました。お台所から取次ぎを願いますと、書生が現れて、玄関へと廻され、その案内で座敷へ通されました。その書生の言葉は会津訛りで、先ず懐かしい一つであります。座敷を観ますと、未だ見た事も無い立派な調度はかり、皆々二度ヒツクリ。

間も無く野田様が笑いを浮かべてお出ましになり、懇ろなご挨拶が有りました。亦、奥方様もお見えに成り、野田様より『之は、園と申します。之から姉さんと思ひ、何事も良く見習う様に』と、御紹介されました。伯母には、『光子の慣れるまで五・六日滞在して下さい』と、仰せられ、見届け役の伯父、伯母が、余りに立派な余りに鷹揚な、そして大変御親切な殿様であるのに、私より先に有難涙に暮れる始末で御座いました。伯父は翌日帰りましたが、伯母は一週間程残り、針仕事を手伝い、安心して帰られました。伯母の帰るときには、流石に心細くなり、めそめそと泣き出しましたので、野田様かち、『左様に氣が弱くては、とても外国なぞえは参られぬぞ』と、叱られましたので、涙を隠し、『泣きはしません』と、申したものの、何と無く淋しく…夜具の袖を濡らした事も御座いました。

私の日常の務めは、朝起きますと茶道具のお掃除、御主人

の御出勤後は、十時迄お手習い、それから針仕事、午後三時頃御役所からお帰りになると、お茶を点て、お客様に煙草盆やお茶を差し上げます。毎日御客様が多いので、夕方迄は忙しく、何も出来ません。夜は野田様から読本を教えて頂きます。その頃流行した『世界国尽くし』で御座いました。

御屋敷の書生は、柴五郎様（会津藩士柴佐多藏280石の五男、後の陸軍大将台湾軍司令官並びに軍事参議官になられた方。城下に在っては、私共の家の極御近所に居られた方ですが、五郎様は離れた所から御帰宅されました時には、御一家の女子・子供の方々は全て御自害されて居りました。お城にも入れず、我々と同じように田名部に逃れられました。）と、真柄という方で、柴様は私と同様に、野田様の御同情に依ってお世話になつて居られたので御座います。他に仙台の人で伊四郎と言う人が居りました。馬丁一人、之は熊本から御供をして来た者、女中は若い者揃い、毎日笑い転げて、賑やかに暮らして居りますから、追々日となれまして、母恋しい心も薄らぎ、伯母の事等も思い出さぬ様になり、知らず知らず其の日其の日を暮らし、勉強も面白く成つて参りました。

青森では七夕祭りを、大変賑やかに、大掛かりで致します。『ねぶた』と申しまして、大きな満燈を各町争うて造ります。牛若丸だの桃太郎、金太郎等、色々な人形が一番多く、大きいのは其の中へ三・四人も入れる位で、大蠟燭を立て、中々見事な物です。東京の祭りの山車等より大きかった様に憶えて居ります。其れを七月六日の夜から、市中を引回し、翌朝早く川へ流すので、其の時は男が女に仮装したり、色々変わった姿をして集まり、誠に面白く、田舎者の私共には、殊に珍しく思われました。

観るもの、聞くもの珍しいものはかりでしたが其の内に大分慣れて、勉強も段々進み、喜んで居りました所、世の中は思う様にならぬもので、野田様と時の県令（近衛様で、長州出身の方。）との間に、意見の相違から不和が起こり、野田様は急に東京に上京せらるゝ事に成りました。『折角世話して之から勉強させる積もりなのを、今別れるのは残念だ、東京へ連れて行こう』と、仰せられ、母へ、お問い合わせ下さいましたが、母は二・三百里も有る東京へ、独り出すのは不安心だからと、お断りを申して参りました。誠に残念とは存じましたが、お連れを願う事は、思い止まる他は無かつたので御座います。

然し、野田様は、『お前独りを離すのを、母が承知せぬのは尤もと思う。母も共々東京へ参るよう、時期を見て申し越したらよからう。』と、本当にご親切な御言葉が有り、有難涙に暮れました。

書生の柴様は、其より少し前に、野田様のお世話で、勉強のため上京なされ（陸軍幼年学校に進まれ）、谷千城様の許で切磋琢磨の甲斐が有りになり、只今では陸軍大将にご栄進遊ばされたので御座います。亦、水沢家の給仕であつた斎藤実、後藤新平両氏の海軍大将となり、伯爵と成られたのもやはり野田様が見込んで東京遊学お世話下さつたお陰で御座います。

私は、一筋道故、野田地まで御同行申し上げることに成りました。青森市外浅虫温泉で、官民の盛大な送別会が御座いまして、野田地に一泊、此処で悲しいお別れを申し上げ、永島と言う方に送られて、亦、田名部の母の許へ帰つたので御座います。

絹の話 (55) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

日本の絹文化の開花

【唐の都と平安時代】

唐の都長安はそれ以前から千年も続くシツクロードで運ばれる絹による莫大な利益で、全ての道は長安に至ると言われるほど、西方からの人、物が集まり、繁栄を極めていました。日本の朝廷も遣隋使に続いて遣唐使を派遣して、文物移入に腐心していました。

遣唐使船というのは「1隻で渡航した様に思われますが実は3〜4隻、多い時は数隻で船団を組んで航海したのです。派遣される人数は学僧など数百人規模であった様です。ところが日本では平城京から京都の平安京に都が遷都され百年あまり過ぎ、落ち着きを取り戻して来た頃、唐の国が混乱し始め、遣唐使の受け入れ等が不安定になって来た事と、都市の整備など受け入れるべき大方の事が移入出来た事情もあって、大きな資金と危険を冒してまで続ける必要が無くなって来ましたので、阿倍仲麻呂の進言により、遣唐使が廃止される事になりました。ここに唐の模倣文化から、それをそしゃくした日本独自の文化が生まれて来る事になるのです。

【日本の衣服文化の発展】

日本の権力者の衣服は弥生時代〜古墳時代には大和尊命の様な衣禪（キヌハカマ）から飛鳥時代には聖徳太子の肖像画に見られる様な衣裳（キヌモ）になり、奈良時代になると皇族以下は朝服（チョウフク）、平安時代になつて束帯を着る様になりました。

女性が高松塚古墳の壁画に見られる中国の隋、唐風（高麗風？）な衣装から、京都という自然の移ろい豊かな風土が影響して、細やかな感性が尊ばれる日本独自の十二単に変化して行くのです。

その中で注目されるのは、女性の使う平仮名文字が考案された事で、女性の社会進出が目覚しく、安定した政権のもと、平安の貴族文化が花開いて来るのです。

【十二単とは】

平安中期になると、魏、蜀、呉や高麗などから渡来した大勢の養蚕、染織の技術者も数百年の時間の経過の中で、その技術が確かな伝承された物になり、その子孫が各地に広がり、生産も上がり、高度な絹の薄織物や染色技も唐物に劣らない物が出来る様になりました。

貴族達は安定の世で栄達の道を極めるには、天皇またはより身分の高い高官の所に娘を嫁がせたり、宮仕えさせることが近道でした。

紫式部などは平安文化が匂うがごとく花開いた中期、一条天皇の中宮彰子に仕えた教養豊かな家庭教師の様な人であったのでしょう。

この方々がお召しになつていた物が十二単なのです。これを競う様に着るには並々ならぬ教養と財力が必要であつた様です。色を重ねて着ると云う事は、その重ねの色がその季節にふさわしいものでなければなりません。季節を感じてそれをうまく表現出来る教養がなければなりません。仕える女房達は中国の古典等にも通じた、高い教養が求められました、都の日々移ろう季節を重ねの色にどう表現するか、熾烈な競争をしていたのです。

貴公子達は顔が御簾に隠れて定かに見えなくても、御簾から僅かに出ている袖や裾の重ねの色合いを見て、相手の教養の高さをはかり、自分にふさわしいかどうかを思い、恋心を募らせたといわれています。

十二単は一番上に唐衣（カラギヌ）と裳をつけ、その下に重桂（カサネウチギ）を五衣（イツギヌ）、多い時で八衣にして重ね、一番下に裏を付けない単衣（ヒトエギヌ）を着て袴（ハカマ）履くというものです。

改まつた場合はその上に小桂（コウチギ）という袴（ユキ）と丈が短い袷仕立てのものを着用するのです。

襲（カサネ）の色目というのは上から下までの衣装の組み合わせをいうもので、それを人目に表現するには、

上に着るものを少しづつ短く仕立て、袖口、衿元、裾や襷（ツマ）など僅かずつずれて重ねた色が見て取れる様にするものです。更に重桂のそれぞれの表裏に濃淡や異なる色をつけることもあつた様です。

それには袖口や裾を折り返して表裏の色を見せたり、透き通る様に薄い羅、紗、絹、生衣（スズシ）練つていない生絹）を使つて光を透過らせて裏の色を見せたりしました。それぞれの衣装に草木の彩を名付けたり、色を表す歌を読んだりすることが一セットになつていたのです。

この様な技も当時の繭は小さく、糸が細かつたので、今の絹に比べて、透けた色が美しく見えたのです。軽くてさばきも良かったと思われれます。

【恋の乱】

平安時代の華やかな文化遺産の殆どが11世紀に起こつた応仁の乱で消失してしまい、十二単の事も平安時代の終わりに描かれた「源氏物語絵巻」などと、「源氏物語」等の色の表現を対比させて想像したものです。

*これを書いている時一条天皇時代ゆかりの京菓子「花守」を頂きました。

短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 四十五回

「月虹」 鮫島 満

二十二 板垣家子夫 5

乞食らが住みて荒らせし塩の沢観音堂もおろそかな
らず
『礫底』昭和二十九年
寂かなる命を養ひ給ひにき今宿薬師堂塩の沢観音
堂

今宿薬師堂も塩の沢観音堂も大石田時代の茂吉が好んで訪ねたところである。ある時の日記に茂吉は、「午後板垣君ト共ニ今宿ノ方面ニ散歩。最上川ベリニ行キ作歌シタリ寝コロソダリシテキルト農婦来リテ茶ヲ飲マセルト云フノデ行ツテ茶ヲ飲ミ甘藷ノ御馳走ニナツタ」（昭和二十一年十月二十二日）と書いている。

そして、『白き山』は「塩沢」五首で終わる。この中で茂吉は「ひとりにて屢も来し塩の沢の観音力よわれをな忘れそ」（昭和二十二年）と詠んだ。大石田を去る二日前の作である。

右の二首は、茂吉が訪ねていた頃から乞食が住んでい

た塩ノ沢観音堂は今ではもう荒れ果ててはいるが、茂吉ゆかりのところだと思つとおろそかにはできないというのである。板垣は、「先生を忘れぬ白痴の乞食ゐて握飯一つ貰ひしを言ふ」とも詠んでいる。ここが、茂吉が「われをな忘れそ」とまで詠んだところだと思つとなおさらおろそかにはできないという感慨であろう。

梟はいまだも啼くや啼かざるや聴きにし人の亡くて
遠しも
『礫底』昭和三十二年
雪被く聴禽書屋のかたはらの梟の杉もすでに老いの
木

茂吉が去つて九年余が経つた聴禽書屋を偲んだ歌。一首目で茂吉のことを梟の声を聞いた人と言っている。茂吉が「わが眠る家の近くの杉森にふくろふ啼けり春たつらむか」「梟のこゑを夜ごとに聞きながら『聴禽書屋』にしばしば目ざむ」「ほがらかに聞こゆるものか夜をこめて二つあひ呼ばふ梟のこゑ」（以上昭和二十一年）、「やうやくに梟の鳴くこゑ聞けばものおちをして鳴くに似たり」（昭和二十二年）等と詠んだことをありありと思ひ出しているのである。

「君の髻も白くなつたね」夢に正しく茂吉先生のこと
『礫底』昭和三十二年

目覚めし後も心に沁みるみ声なり暁の床に吾は思へり
 わが夢に顕ちしみ顔は写真に見しデスマスクなるこ
 とに気づきぬ

十代で茂吉に会って以来その身边にあった佐藤佐太郎や、
 〈茂吉の秘書〉と呼ばれることもあった山口茂吉らと、
 その年数は比べるべくもないが、大石田時代の茂吉の世話をした板垣の二年間が濃密なものだったことを思わせる歌である。

けふ登る蔵王熊野の岳を掩ふ雲に濡れぬむ恋ふる師の歌碑
 『湧水』昭和四十一年
 三本檜の沢水飲みて憩はれし老いづける茂吉現に偲ぶ

蔵王山熊野岳の頂上に「陸奥をふたわけざまに聳えたまふ蔵王の山の雲の中に立つ」(『白桃』)を刻んだ茂吉の歌碑が建てられたのは昭和九年であったが、茂吉がそれを見るために登ったのは昭和十四年であった。この時の同行者の中に板垣はいなかったから二首目は茂吉の「歌碑行」の歌「いただきに寂しくたてる歌碑見むと蔵王の山を息あへぎのほる」(『山腹の三本檜』といふところ水湧きいでて古ゆ今に)、『寒雲』昭和十四年)を踏まえ

たものということになるが、板垣はそこで水を飲んだ茂吉の姿を現実のように思い浮かべているのである。

束ねたる笹を傘にし山越えし茂吉の思ひ出も遙かに
 なりぬ
 『湧水』昭和四十四年
 猿羽根峠越え給ひ来て憩ひにし小国川の河原冬日か
 げれり

昭和二十二年に茂吉に従って猿羽根峠を越えた時のことを偲んだ歌。

一首目、板垣の〈随行記〉によると、板垣は峠口まで乗せて貰ったトラックに茂吉愛用の棧俵を忘れて熊笹の葉を代用することを思いついて採るうちに、折しも照ってきた陽光を避ける傘代わりにもなることに気づいたという。〈随行記〉には「いやあ、これは驚いた。君は頭がいい。こんなに頭がいいとは少しも知らなかった。驚いたよ」という茂吉の言葉を残している。茂吉は「笹の葉を敷きていこへるたうげ路ゆ南のかたをふりさげにたり」と詠んでいる。

二首目、峠を下った二人は昼食の場所を小国川の岸辺に決めた。茂吉は「したしくも海苔につつましにぎり飯さばね越えきて取りいだすなり」(『小国川宮城ざかひゆ流れきて川瀬川瀬に河鹿鳴かしむ』)と詠んでいる。

楽しい時間 31

山本紀久雄

2015年4月30日 カンボジアに絹緋の森をつくった日本人(1)

2015年2月、国立民俗学博物館の研修ツアー「手仕事への回帰」に参加し、カンボジア・シエムリアップ



アンコールワット

近郊のIKTT (クメール伝統織物研究所 Institute for Khmer Traditional Textiles) の「伝統の森」を訪れた。クメール Khmer とはカンボジアの主要民族で、古くからメコン川中・下流域に分布、言語上はモン族とともにモン・クメール語族を構成する。主に稲作農業を行い、ほとんどが仏教徒。6世紀に起こったクメール人王朝の真臘(しんろう)(クメール人王朝の

中国名)は、アンコールワットなどを造営した。

IKTTへは、幹線から外れた厳しい悪路の道路をバスで走り到着し、初めて経験するカンボジアの森の中に所在する「伝統の森」の状況が珍しいので、眼をみはり、きよろきよろしているところに、所長の森本喜久男氏が現れ

た。

森本氏は、クメール王朝から続く伝統的なカンボジアの精緻な絹(きぬ)緋(がすり)、この絵緋の美しさは、他の地域では見られないカンボジア独特の織物であるが、長い内戦やポルポト政権の黒衣の強制で衰退し、餓えて蚕も食べ尽くしたといわれていたものを、2003年よりこの「伝統の森」で再生するプロジェクトを行っている。

その森本氏の初印象は「我々バス内のメンバーとは服装が違う」である。身体にフィットした布地でつくられた、僧侶みたいな衣服をまとっている。

笑顔で森本氏は「よくいらつしゃいました」と、木々に囲まれた織物作業場の回りを子供が走り回り、その傍らを犬や猫、鶏も放し飼いになっている状況の説明と、近くに生えている樹木一本一本について、その幹を撫ぜながら、植えた時代と、樹木特性についても解説し、地面にある落ち葉を拾い「これは大事な財産で原料になります」と大事そうに手にとる。森の全てのものに愛情が注がれていることがわかる言い方と眼差しである。

その語りの中で「先般、ラルフ・ローレン社長夫妻も来ました」という発言に興味を持つ。ご存知の通りラル



フ・ローレンは、高級スーツやポロシャツなどのメンズウェアでその名を知られている著名ブランドである。このような不便なところにラルフ・ローレンも来たというが、取引をしているのだろうか。その回答は後で森本氏が語ってくれたが、まずは「伝統の森」への道筋を最初に紹介したい。

カンボジア・シエムリアップといえば世界遺産アンコールワット遺跡で有名だ。そのシエムリアップから北へ車で一時間のシエムリアップ州アンコールトム郡ピアックスナエンに「伝統の森」がある。ここの広さは23ヘクタール、約7万坪、東京ドームの四倍半である。西側に小さな川が流れ、東側の一部はシエムリアップ川に接している。敷地の半分以上は開墾せず、自然林の育成地域として森を育て、樹高7〜8メートルになっているが、その地はかつてブッシュのような荒地だったという。

中心には、乾季にも枯れない沼がある。沼には、雨期になると川の水が流れ込み、乾季と雨季とでは2メートル近い高低差があつて、淡水生のマングローブのような木もある。沼には魚が多くいて、森に住む人たちの食材にもなる。現在、この森には約150人の人たちが暮らしている。

次にゲストハウスに入る。ここでは夕方から夜10時までしか電気がない。それ以後、動き回るには懐中電灯が必要である。戦後の日本の生活を思い出す。因みに昼間は明るいので電気は灯さない。

下の写真がゲストハウスで、ここでツアー参加者18名全員一緒に食事する。

食事は美味しい。但し、アルコールの在庫はないので、シエムリアップのスーパーから各自買い求め持参である。

森本さんを囲んで今までの様々なご苦労と、未来への夢をお聞きしていると、[KJ]織物について以下の考え方を述べられた。

1. [KJ]の絹緞商品はブランド化しない。
2. プティックとは取引しない。
3. 納期を守らない。
4. 数量も守らない。

この発言にビックリする。今まで関与してきたどのビジネスでも「ブランド化」「納期は守る」というのが商売の鉄則だった。したがって、ラルフ・ローレンとは取引があり得ないことになる。ラルフ・ローレン社長夫妻は驚愕の思いで帰っただろう。以下次号へ続く。



月ヶ瀬に行く

夏目勝弘

中村憲吉と長塚節の出合いは、憲吉が二十一歳の時東大法学科に入らんと上京中、伊藤左千夫に合ひ、伴はれて根岸子規庵を訪ひ、大龍寺の子規の墓に詣つた。

明治四十四年十二月左千夫、茂吉とともに根岸養生院に長塚節を見舞う。

長塚節の死は大正四年二月八日享年三十七歳。憲吉が月ヶ瀬に行ったのは、大正十三年三十六歳のとき、歌集「軽雷集」の月ヶ瀬行の詞書に（新曆三月十五日土曜日勤務を終へ、大阪より来りて、夜半伊賀上野駅に汽車を下る）とある。

この詞書から思うことは、長塚節が三十七歳で死去その歳に近づいてきた。そんな思いが過ぎつたのではないのだろうか。

今回は憲吉の歩いた道を通ることにし、詞書の（人力車を尾山にすてて、徒歩新街道をくだる）とあるバスを尾山口で降りることにする。軽雷集の月ヶ瀬行の一連の歌の順を追つてみることにした。

同じ三月十五日にしようと思つたが、予報が雨とあつたので、曜日の同じ十四日土曜日とした。

亀山から関西線で月ヶ瀬に向う。雨が窓にぼつぼつと当りだした。そして少し長いトンネルを出た伊賀では先が見えないほどに雪が舞っている。

梅まつりの臨時バスが出る月ヶ瀬で降り時間まで二十分ある駅前はまだ、ちらほらと咲いているのみ、梅まつりに行く二十余名が全員老人ばかり。

ようやくきたバス、駅前が狭く坂の上のためバスが方向を

変えるのに十分余りかかった。

狭い道を曲り上り下りつつ月ヶ瀬に向う雨の止む様子はない。奈良県の標識をすぎると。

○みちのべの枯桑烟は霽へどもなほ如月のさむき月かげ

月ヶ瀬に向うばすの窓からは、桑烟でなく手入れされた茶畑がそこに見られ茶どころとなつていた。

バスを尾山口で降り、詞書の新道であろう道をくだる。

○我がくだる小溪にかかれ幾つものかたりことりと月夜の添水

○尾山越えて直ちにふかき谷となれり月影ふみて坂路をあやに今はもう添水などはない、ふかき谷となつていゝのは変りがない。

○十日月光おぼろなる谷のそ二見れば遠しも月ヶ瀬川のおと今はダム湖となり谷そこなどなく湖面が間近に見える。

○きさらぎの梅の村へくだる月夜みち坂なかはよりはや咲く白梅

今年の梅も歌のような花の状態であつた。

○月よみに坂路はあかし白うめの照らされし下をとほりて我れは

白梅の下を傘をさしながら谷道をくだつていった。もう三十分は歩いたのであろうか教えられた憲吉の泊つた「浴花亭」はまだ。

○旅びとに我れありにける夜更け村に宿叩きおこす軒の月かげようやく浴花亭の大きな屋根が見えてきた、憲吉が叩いたであろう玄関の前に立つ、人影も物書もない十五年ほど前に廃業していた。

○更くるまで雨戸をあけて月にむかふ旅のやどりの軒のしら梅浴花亭が残つていたことがこの旅の収穫。

「氷魚」のことから (173) 岡本八千代

今、「奥の細道」の勉強会(いーはどぶ)は、「敦賀」まできた。今年の春の選抜高校野球は、敦賀気比高校が初優勝をした。その前に松山東高校(子規の伝統ある学校)は惜しいところで負けたのであった。しかし、私はどちらも縁を感じつつ、少年たちの少年らしさ、その一途さに感激した。

正岡子規は草葉の陰でどんな思いだったのだろうかなどとも思った。今回も、子規の少年時代のことを書きたい。子規は、

○「この時余は中学校にありながら学課は全く抛ち去りて、たゞ夜ごとに寺院学校などを借り受け、学友十人ばかりと共に「自由の権利」などと演説するを無上の快樂とはなしたるなり。今よりして思へばこれも自由党の余波を受け者なるべし。」

と述べている。また、
○「自由何くにかある」諸君まさに忘年会を開かんとす」「天まさに黒魂を現あさんとす」など当時の演説会の草稿とおほしきものが幾つか遺っている。——と。

これは明治十五年から十六年、子規の十六歳から十七歳にかけての出来事であるらしい。(柴田宵曲著、「正岡子規」(岩波書店)を参考にした)。

現代の少年たちと比してどうであろうか。相当に氣どった

態度、文章の気がするが、当時は、若い子規たちのような少年たちの心をゆさぶるような新時代の波がおしよせて来たころであつたらしい。思春期の少年たちはおそらく心を動かされて、刺激させられたと思う。平成の現代ではなおさら、いろいろな問題が起こされて、私は、少年たちの行動に目を見張ることがある。

明治十六年五月、ついに子規は松山中学を退いてしまつたであつた。その時の一詩を書きぬいてみよう。

・ 松山中学只虚名…(松山中学は只虚名)

・ 地小良師從熟聽…(地に良師なくいずれ従いて聴かん)

・ 言道何須講章句…(道を言うは何ぞ章句を講ずるを須た

ん)

・ 染人不敢若丹青…(人を染むるは敢て丹青に若かざらん

や)

・ 喚牛呼馬世応毀…(牛を喚び馬を呼びて世応に毀れんと

し)

・ 今是非非吾独醒…(今は是非にして吾独り醒む)

・ 忽悟天真存万象…(忽ちに天真の万象を存するを悟り)

・ 起披蛛網救蜻蜓…(起ちて蛛網を披きて蜻蜓を救う)

この退学については、おそらく、先に又また従兄の三並良氏が東京に行ったので、自分も上京の志がつつてきたのではないか? 詳しいことはわからないけど。このあたりから、松山の少年、青年たちは上京の志をあつくしていったらしいのであつた。……あと次回に。

ことのはスケッチ (438) 今泉由利

『天田愚庵』⑤ 年譜

△明治十七年(一八八四年) 愚庵 三十一歳

○二月二十五日 全国博徒大検挙にあい、次郎長は静岡井之上宮監獄に入獄。

○四月 愚庵の養子名、山本鉄眉著「東海遊俠伝」、輿論社より刊行される。

○この頃、富士裾野開墾事業は不振につき閉鎖。

○十一月 鉄舟の世話により、愚庵は有栖川宮家の家臣となる。

○次郎長の山本家を離籍。旧姓「天田」に復す。

○上京、肺病再発。鉄舟、丸山作楽等の世話になる。

○丸山作楽は、国事犯の罪により、明治四年、長崎獄中に居た。ここで愚庵と知り合い、歌を教授される。

丸山作楽の歌

○たまきはる幾万代も死にかわり生きかえりつつ事を遂げはや

○取るかぢの音たかだかに霞ふる鹿島の崎を漕きたむ小舟

○あら汐のこよろき磯よ雲居なす大嶋のねろにさ霧立つ見ゆ

愚庵の歌

○音にのみ聞きし鳴門の渦潮の渦まく瀬をもこき渡り見つ

○漕く舟を呼ぶは誰か子ぞ鳴門崎刈藻の島の海人小女かも

○父母と見れば夢なり夢にだに其面影よ消すも有なん

○花薄招く方こそ床しけれ尋ぬる人の跡もなければ

△明治十八年(一八八五年) 愚庵 三十二歳

○有栖川宮家の家令に従い、下総猫村の開墾事業の監督に当たった。

△明治十九年(一八八六年) 愚庵 三十三歳。

○二月 有栖川宮家を辞し、大阪内外新報社へ幹事として入社。

○新聞社の仕事は次々と、北の新地や祇園に通う日が繁く、茶屋酒に酔い痴れる。言動が荒々しくなった。

○日曜ごとに、山岡鉄舟の紹介により京都林丘寺の由利滴水禅師六十五歳に参禅する。

△明治二十年(一八八七年) 愚庵 三十四歳。

○生あるものは必ず死ぬ。やがて自分にも訪れる死である。滴水禅師の許で、出家して仏門に入ろう。父母の菩提のためにも。

○四月八日(釈迦の誕生日) 京都林丘寺において滴水禅師の剃度を受け、鉄眼と称す。

○滴水禅師が与えた偈

打破八識 八識を打破して

始称丈夫 始めて丈夫と称す

莫認小智 小智を認むるなかれ

須至大愚 すべからく大愚に至るべし

○八識とは、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、未那識、阿頼耶識、ここに愚庵と名乗る。

○「頭おろしける項」

○墨染の麻の衣手朝な朝な手向くる花の霧に濡れつつ

○驚の声ばかりして山寺の春はしずけきものにぞありける
三十四歳の出家だった。

○与謝野礼蔵（鉄幹の父）

鉄眼の髪をおろして林丘寺に入りし時

○入りて見よ心のおくに何かあらん山は山なる水や水なる

○直土に藁解き敷きて寝ぬること常と思えば悲しきものを

○いとほしき妻と子らとに食はずへき飯もなきまで貧しきや何ぞ

○男子はも国を嘆けど若草の妻の嘆くは家の子のため

愚庵の歌

○中山の与謝野のおちはいたつきてわれより先にやがて死ぬべし

○魂のみそ帰りきませる秋たたば立ち帰らむと云ひし君はも

○秋たたば見むと契りしその萩の露より先に消ぬるはかなさ

△明治二十一年（一八八八年）愚庵 三十五歳。

○初春、陸羯南、愚庵出家後はじめて来訪。

○七月十九日 身を清め白衣に着替え山岡鉄舟坐禅のまま大

往生。行年五十三歳。谷中全生庵に埋葬。

○京都相国寺に於て、大法会を行なう。

△明治二十二年（一八八九年）

○大日本帝国憲法の発布。

△明治二十三年（一八九〇年）愚庵 三十七歳。

○愚庵は、山岡鉄舟の三回忌法要に出席のため滴水禪師のお伴をして上京。

○陸羯南は、新聞「日本」を発刊し、東都に筆名を高めていた。

○当代漢詩の第一人者といわれた国分青厓も「日本」の社員として活躍。

○陸羯南へ、愚庵自叙伝ともいふべき「血写経」の原稿を送る。

○丸山作樂、貴族院議員となる。

○愚庵は、このころ陸羯南宅で二十三歳の正岡子規と相識った。

△明治二十四年（一八九一年）愚庵 三十八歳。

○秋、北海道に大漁場をもつ竹馬の友、江政敏の出資を得て、

滴水禪師の許可を得、京都清水産寧坂に、四畳半、二畳の庵を起工。

○上野、青森間の鉄道開通。

△明治二十五年（一八九二年）愚庵 三十九歳。

○春、草庵完成。愚庵と号す。

○身回の世話を、伊藤源吉（人形師、三寧）夫妻に託す。

○七月 上京し丸山作樂方に滞在。

○十一月十六日 正岡子規が高浜虚子を伴って愚庵を尋ねた。

子規の手土産の柚子味噌を舐めながら、愚庵、虚子、子規は夜遅くまで語り合った。

子規はこの出来事を「獺祭書屋俳話」に記し、新聞日本に発表。

○子規は、松山に住む母と妹を迎えに往路、復路に愚庵を訪ねた。

○子規は、新聞日本に入社。

○子規、ベースボールに熱中。多くの用語を作り出した。

つづく

編集室だより【二〇一五年 四月】

☆三河アララギ賞 清澤範子様

平凡に家事う片付け歌を書き胸一杯の最善にある

お心のあるがままの情況と素直な言葉で表現され、万葉集の歌に近くおられます。

○京橋・並樹画廊・間中久子作品展―90歳の手習いですが―世界を旅され、その時々スケッチは水彩画となり、日本画となり…。ほのぼのとした作品が並びました。

○宮野古民家自然園・武蔵野の原風景を留めている屋敷林、茅ぶき屋根の上の銅板葺き。江戸末期から、現在に至るまでの民具、生活、農作業道具：ほっとするスペースでした。

○ロシア連邦大使館、大ホールに於いて、ロマノフ王朝を思わせる、ロシア琥珀芸術を堪能しました。樹脂に^{よじ}にされた虫や葉っぱや…その時が偲ばれ…感慨深かったです。

○上野動物園吟行。一八八二年（明治十五年）開園した日本初の動物園。国や環境や季節やまったく異なる所から、連れてこられ、囲われ…本当に可哀想だけれど、俳句が生まれました。ありがとう。

○今月号から執筆いただく「辻照子先生」を紹介します。

ボストン・パリ…での長い海外生活で、トロタル・コーディネット、テンプル・マナー、料理などを学ばれ、帰国後、クッキング、ワイン、ラッピング、テンプルアレンジ等、生活を楽しむことをご指導下さいます。

○奥多摩のドンネル（犬）のお墓参りにゆく。東京の桜を追いかけ、追いかけて、花の季節が移りゆき…頂度その頃出掛けたのに、奥多摩に近づくくと、万の春を一望にした。白く咲く二輪草のなだり、片栗の花、土筆、おどりこ草…みんな従えて、幸せのドンネルを思った。

○水温む洗足池へ。日蓮聖人が足を洗はれたのは、どうだったのだろうか。無血革命を成した、勝海舟、西郷隆盛を偲び、芽吹いた柳が長くゆれていた。

「隅田川・向島周辺の七福神をめぐる」。

①毘沙門天（多聞寺）②寿老神（白鬚神社）③福祿寿尊（向島百花園）④弁財天（長命寺）⑤有袋尊（弘福寺）⑥恵比寿神（三囲神社）⑦大国神（三囲神社）。言問団子を食し、長命寺の葉桜三枚にかこまれた桜もちを持ち帰り、知らなかったことが多かった。

○インドの仏・コルカタ・インド博物館から、インド佛教美術の至宝が来日。

アジア最古の総合博物館。仏陀不表現から、存在を暗示…足跡、台座、花綱で飾られた樹木…。後、釈迦の仏伝説の美術。釈迦の偉大さを示す超自然的な出来事。

悟りを開いた仏は、装飾を身につけなくなり。インドの仏様が日本の仏様になってゆく過程。興味深い。

和菓子街道（104）

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

伊勢街道(27)

賑やかな門前町のおかげ横丁を通り抜けると、大きな鳥居が見えてくる。鳥居の先には、五十鈴川にかかる宇治橋。五十鈴川は、神宮の神域の森から湧き出る清らかな流れだ。昔の旅人はこの川で禊をして、神宮に参拝したといわれる。

歩いて伊勢神宮に辿り着いた今、西行の歌が自然と口をついて出た。

〈なにごとの おはしますかはしらねども

かたじけなさに涙 こぼるる〉

西行の生きた鎌倉時代には、僧が神宮に詣でることは許されておらず、五十鈴川の対岸にある僧専用の遥拝所から天照大御神の坐す森を遥拝する習わしがあった。この歌は、遥拝所に立った西行が、神宮の尊さを前に自ずと感謝の念が涙となって溢れ出た、と詠ったものだ。



宇治橋を渡って、内宮の神域へ。

知識としてこの歌は知っていたが、実際に歩いて参宮して初めてその感慨を実感を伴って自分の中で確認した。神宮とは、そういうところなのだ。

お知らせ

▽七月号の原稿は、六月一日(月)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※原稿の返却を希望される方は、返却用封筒に切手をはり、毎月の原稿に同封して下さい。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

△この四月は選挙の投票に二回行った。今回も花の種を貰ってきた。

今まで発芽したことがないため花を見たことがない。

雑草などは取っても取っても次ぎと出てきて、除草剤の力をかりなくてはならなくなる。

鑑賞用として外国からの花などの幾種かは雑草となり除草剤の対象となっている。

雑草にも名前があるが、知っているものは少ない。

名前を知らないため一首にしようとも思わない。名前を知ることによって自分の身近なものとなり一首となる。

名前を知れば動植物とでも思いで会話ができ、そこから歌が生れてくると思う。(夏目)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月日より、半々年分一万円、一カ年分二万円の前納された。ただし、購読会員は、半々年分二千元、一カ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年五月二十五日印刷 第六十二巻 第六号
平成二十七年六月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子・森岡 陽子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会 〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一の二六の六A

T E L (〇三)五九二四一〇六五

振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九

URL

E-mail yuri188@cronos.oon.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

印刷所

株式会社 核 創 美